
目隠し 前編

エルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目隠し 前編

【Nコード】

N4490A

【作者名】

エルル

【あらすじ】

少年はごく普通の中学3年生。いつだって、仮面をかぶって生きている、そんな人間。そんな少年の机に、ある日1枚の紙切れが…。その紙切れが、少年の心の転機となる。

さまよう人よ、何を迷う
道は一本しかないだろう？
何故手探りで進むのだ
真っ直ぐに…ふらつくな
前を見る
光が見えるだろう？

「…何だこりゃ」

家に帰って机を見れば紙切れが1枚。
俺の家族に、こんなことする奴、いたっけ？

「お前は神か」

はぁ、とため息をつき、紙の上に鞆をドサ、と置いた。
何が言いたいのか、さっぱり分からない。
こういうのは見なかったことにするに限る。
俺は見なかった。

この紙切れを見なかった。

俺は中学3年生の城崎千晴。
成績普通、運動普通。

特に何も突出していない、平凡な中学生。

いつもいつも、学校に通って、友達と笑い、楽しんでいるような中学生。

笑い、楽しんでいるような中学生。

ような。

あくまでそれは建前の自分。

グループも、クラスで一番強いところにいて。

教師の悪口、いじめられている男子への暴言…。

つまらないことで笑い、ふざけ合いを楽しんでいるように見せている。

そいつらに嫌われると、やばいから。

そこにいないと、心配で心配で。

結構こういう風に思ってる奴っていると思うけど、俺もその1人で本当はしたくないことばかりを、強制させられて生きている。

これが俺。

*

*

*

夕食も食べ終わり、風呂にも入った。

牛乳も飲んで、歯磨きもした。

見たいドラマも、もう見終わったし、後は寝るだけ。

…間違い、明日の準備が終われば寝るだけ。

「あーあ、明日古典あんのかよ…」

ぐしゃぐしゃと、まだ乾き切れていない髪をかく。

「予習しねえと」

椅子を引き、机に無造作に置かれた鞆をどける。

「……………」

どかしたそこには、紙切れ。

そっぴやこの鞆、無造作に置いたんじやなかったつけ。
意図的に…この紙切れを隠すために置いたんだっけ。
本当に、見なかったことになってたよ…。

「はあ」

鞆を床に落とし、椅子に座って紙を再度見る。

「見なかったことにしたけど…」

捨てなかったのは、きっと、また見たかったから。

ちゃんと、内容を考えたかったから。

この紙に書かれた言葉は、なんだか、とても重要な言葉のような気がする。

誰が置いたか分からねえけど、切に、何か訴えているような、そんな気が。

俺はその紙に書かれた言葉を声に出して読んでみた。

「さまよう人よ、何を迷う。

道は一本しかないだろう？」

何故手探りで進むのだ。

真っ直ぐに…ふらつくな。
前を見る。

光が見えるだろう？…か」

紙を、何度も何度も黙読する。

何だか分からないけど、俺の机にあったってことは、俺に言ってる
ってことで…。

つまり、俺に指摘しているってことか？

「もういいや」

結局俺にはその紙の意図することが分からず、丸めてゴミ箱に投げ
入れた。

そして、俺は古典の予習をし始めた。

さまよう人よ、何を迷う

道は一本しかないだろう？

何故手探りで進むのだ

真っ直ぐに…ふらつくな

前を見る

光が見えるだろう？

＊

「う…」

無重力。

周りは真っ白で、自分がここ寝ているのが、本当に不思議。

「…夢」

ここは夢だ。

夢を自覚できるって、初めての体験。

『目覚めたか、人間』

「!？」

俺は後ろを振り返る。

そこにいたのは、俺と同じ背丈ぐらいの何か。

白い布で全身すっぽり覆われていて、何なのか分からないが、これが声の主。

俺は訝りながら、そいつに声をかけた。

「お前…何？」

『すまんがそれは、今は言えぬ。』

ただ、お前に見せたいものがある』

自分勝手な白い布。

白い布は手らしきものを出し、空間を引っ張った。

そこに現れたのは、ここと対照的な黒い空間。

中には、やっぱりそいつと同じような白い布の生物。

『これは、お前達多くの人間が歩いている場所だ』

「これが？」

ただ、暗いだけの空間が？」

『そうだ』

白い布はこくりと頷く。

『そして、これがお前だ』

そいつは黒い空間の白い布をはぎ取る。

そこにいるのは…。

「俺…！？」

まぎれもなく、俺と同じ顔かたちをした…『俺』。

『進め』

白い布は、『俺』に命令する。

俺はその光景を見て愕然とした。

『俺』は確かに進み出した。
しかし。

「…なんだよこれ…」

『俺』はきょろきょろ辺りを見回して、おどおどして、足下を確認して歩く。

前に手を出して手探りしながら。

おぼつかない足で、ふらふら倒れそうになりながら、進む。

『これがお前の本当の姿だ』

白い布は続ける。

『お前には見えるか？

お前が歩いている道が。

お前の道が』

俺は『俺』の足元を見る。

「見えない…いや、ない？

…道が、ない？」

『俺』の歩いているところに道はなかった。

道がどんなものか分からなかったが、直感的に、道と呼ばれるものがそこにはないのが分かった。

『分かるか。

お前の道はあれだ』

白い布が、指らしきもので、『俺』の右隣を差す。

「あ…」

確かに、そこには俺が見ても分かるような、道があった。

周りがそこだけほんのり明るくて、温かみさえ持っていそうな、そんな道。

「…かなり逸れてるじゃ…ないか」

『俺』は自分の道の5メートルぐらい離れたところをおどおど歩いていた。

お前の道はそこなのだよ。

道は1本しかない。

しかし。

お前は道なき道を歩んでいる。

足下に道はない。

お前が歩いているのは闇だ」

「闇」

ごくろ、とつばを飲む。

「俺」が歩いている所は闇。

道から逸れて、歩いている場所は闇……。

俺は白い布に尋ねる。

「闇……って歩けるのか？」

[illegible]

変なところで切つてすみません（汗

前編・後編です。

なんだかよくわからないかもしれませんが、
お付き合いくださいw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4490a/>

目隠し 前編

2010年10月11日03時59分発行